
シヨタコンお姫様はお好きですか？

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨタコンお姫様は好きですか？

【Nコード】

N7985Z

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

信じられないかもしれませんが、水瀬にも苦手な女はいるんです。

桜井美奈子の日記より

月凸凹日

水瀬君が怯えている。

授業には出ても、居眠りしない。

授業が終わった途端、姿を消す。

お昼ご飯でさえ……。

水瀬君にとって「最高の楽しみ」のこの時間まで顔を出さなくなつたので、さすがに心配して、みんなに心当たりを聞いてみることにした。

私の質問に、

羽山君、秋篠君、未亜。

居合わせた全員の視線が、一人に向かう。

「あ、何で、私の顔を見るんですか？」

「瀬戸さん、健呆症？」

「……更年期障害か？」
「いいすぎだよ。羽山君。」

中身の入ったジュースの缶をともに喰らった羽山君が目を回したけど、さすがに私も、同情するわけにいかなかった。

「あー。ヒデエ目にあつた」

保健室で簡単な治療を受けながらボヤク羽山君。

「ことある事に水瀬君が地獄見てるんだから、少しは学べばいいのに」

「落とし前は水瀬につけてもらうことにしよう。さあて、探しに行くか」

「悠理君？」

羽山君の鼻に絆創膏を貼っていた三千院先生が、ベットの方に声を掛けた。

「悠理君？お友達が来てるわよ？」

「ぼ、ボクはいません」

「いるじゃんかよ！」

羽山君が乱暴にベットから布団を引つpegす。

布団の下には、確かに水瀬君がいた。

「さぼってんじゃねえ！何してやがる！」

「うううつ……せ、先生……隠してくれるって」

「対象に、この子達は入っていなかったもの」

「とにかく行くぞ！」

「お願いだからボクを行方不明にして！」

「わけわかんねえこと言ってるな！」

「ラーメンでも何でもおごってあげるから！」

「はあ……？」

「お、お願い！せ、せめて、午後だけでいいから！」

両手を合わせて拝み出す水瀬君に、私と羽山君は思わず顔を見合わせた。

「つまり、お前は、午後からの外部視察に関わりたくない。」

「というのか？」

「そう」

外部視察

明光学園は、在籍する生徒達の特殊性から、各方面からの視察を受けることがある。

そして、今日、午後より視察に来るのは……。

「お前、ラムリアースに何か因縁でもあるのか？」

「べつ、別に国単位で怨恨はないよ……」

「ルシフェルの件もあるし、戦争の時の因縁じゃねえだろうな」

「……コクン」

「おいおい」

肩をすくめて「お手上げ」の仕草をする羽山君。

「お前、殺し合いの中での因縁沙汰を学校に持ち込んでくれるなよ」

「こ、殺し合いの方がまだ気が楽っていうか……」

水瀬君、もう泣き出している。

「お、お願い！お願いだから！友達を助けると思って！午後だけ！午後だけは！」

「……わかった。高くつくぞ」

ため息混じりに席を立つ羽山君が言った。

「ただ、保健室以外の方がいい。サボっていると疑われたら真っ先に来るのはここだ」

やっぱ、友達思いで、面倒見いいんだよね。羽山君。

「ほ、本当！？」

「二言はないが……」

「じゃ、この前、品田君から、HなDVD買っていたの、涼子さ

んには黙っていてあげる！あの“巨乳看護婦”何とかいうヤツ！」「殺すぞ！」

ラムリアース帝国

地中海にある騎士発祥の地とされる大国で、騎士達にとっては聖地に近い国とされる。

ヨーロッパで最も超帝国の遺産に恵まれている国だから、私としては、観光名所ばかりが頭に浮かぶ。

で、今日、学校を訪問するのは、来日中のこの国のお姫様。

ナターシャ・レイソン・コーダンテさん。

次期皇帝にして、聖導騎士団長。戦争でも大活躍した人だ。

未亜に写真を見せてもらったけど、華やかな感じの美人さん。

本当に、ヨーロッパのお姫様って感じの人だ。

水瀬君……なんで、そんな人を怖がるんだろう。

黒塗りの車で来校したナターシャさん（お姫様に「さん」は失礼かな？ま、いいや。日記だし）。

当然、一人で来るはずはなく、大使館の関係者やマスコミまで、いろんな人が一緒に来る。

剣を下けている人は、きっと騎士団の関係者なんだろう。

ナターシャさんの周り、かなり騎士が多いみたい。

でも、生徒達が、最も注目したのは、何より日本側の一人。

あえば・くすは
饗庭樟葉

ナターシャさんと違い、物静かな深窓の姫君って感じの人。さすがに先代の天皇の妹の血を引く、いわば宮家の人ってところかな。にもかかわらず、皇室近衛騎士団副長兼近衛兵団長代行、近衛中将。戦争では、魔王の親衛隊長の首級を上げた、ルシフェルさんと並ぶ武勲の持ち主。

つまり、今、この学園で、ルシフェルさんを除いて戦争で活躍した女性騎士のツートップが顔をそろえたことになる。

こんなことは滅多にない。

だからこそ、戦争での二人の活躍に興奮した経験のある生徒達は、二人を招いての講演を学園祭並の期待で待ち望んでいるのに……。

私達のクラスの騎士養成コースの生徒達は、体育の見学を受けることになったけど……。

なぜか、マスコミが一時的に下げられ、樟葉さん達自身も、私達から少し離れる。

そのワケは……。

「く、樟葉さん！いつ、痛い！」

「うるせえ！この私が来てるってのに！保健室で寝てるたあい一度胸だ！」

怒り心頭という顔の樟葉さんに首根っこを鷲掴みにされ、廊下を引きずられてくるのは。

「水瀬君、捕まっただみたいね」という私に

「お気の毒様……」と手を合わせる瀬戸さん。

水瀬君の姿に、ラムリアース側がザワツとなる。

間違いなく、水瀬君の姿に驚いている。

対する水瀬君は顔面蒼白だ。

そして。

「悠理ちゃん！（＾ｏ＾）」

「ひっ」

絶叫とともにれる歓喜の声と共に水瀬君に抱きついたのはナターシャさん。

何か、頬ずりなんてしてる……。

それをきっかけに、ラムリアースの騎士の人達は何人も水瀬君に声を掛け、似たように抱きついたり、キスしてる女騎士までいるし。

まるで、古くからの戦友に再会したって感じの喜び。

「やっぱり、一年戦争の絡み、なんだろうなあ……」

「うん……綾乃ちゃん。押さえてね」

横で殺意満々の瀬戸さんを、珍しく未亜が止めに入っていた。

視察は順調に行ったらしいけど……。

「あ、博雅くん？」

体育の授業が終わった後で、秋篠君に声を掛けてきたのは、樟葉さんだった。

「ちよつといい？」

水瀬君の友達

その秋篠君の説明に、樟葉さんは、他言無用を条件に同席を許してくれた。

講演の準備で未亜がいないことを、神様に感謝。

「はあっ……まいったわ。あのバカ息子にも」

樟葉さんが、席に着いた途端、そう言っただけ息をついた。

長いストレートの黒髪といい、涼やかな目元といい、本当に美人だ。

結構、ルシフェルさんって、大人になったら、こんな感じかもしれない。

「あの、水瀬、どうしたっていうんです？あいつがあんなにパニックになるのは……」

ちらりと瀬戸さんの顔を盗み見る秋篠君。

気持ちはよくわかる。

「ナターシャはあの子にとって」

「？」

「ま、トラウマってヤツね」

「はあ？」

「ほら、知らない？ナターシャの裏の趣味」

「あ、あの……まさか、シヨタ……」

知っているのは私だけだったらしい。

ナターシャさん、実はある側面でかなりスキャンダルの持ち主なんだ。

曰く、シヨタコン。

年下の小さい男の子に異様なまでの執着心があるらしく、ベットに引きずり込んだ男の子の数は、両手両脚の指じゃ足りないと言われる。

別名 ラムリアースの吸い取り女

「そ。そっちの趣味。で、アレにとって、あの子はもろストライクど真ん中だったらしくてね。戦争中は大変だったんだから」

メキメキ……

何か、変な音がする。

「悠理君とは、そういう関係なんですか？」

「瀬戸さんテーブル壊さない！ ついでに、そんな怖い声ださないで！」

「……ま、あの反応から察してあげて。喜んでいないのは確かでしょう？」

収まらないのは、瀬戸さん。

もう、怖いなんてモンじゃない。

演壇上のナターシャさんを睨みっぱなし。

さすがというか、ナターシャさんは知らん顔していたけど……。

講演が終わり、とっさに逃げ出そうとした水瀬君を捕まえたのは、何と瀬戸さんだった。

「あ、綾乃ちゃん!？」

「……」

グイッ。

瀬戸さん、何と、水瀬君の腕にしがみつくように寄り添ってきたんだ。

周辺の生徒からは驚きの声上がる。

しかし、瀬戸さんの視線は。

今、思い出しても、あれは怖かった。

本当に恐かった。

瀬戸さん、間違いなく、ナターシャさんにケンカを売った。

水瀬君を巡って、二人の女が視線が不可視の火花を散らし続けている光景なんて、立ち会いたいもんじゃない。

無言でにらみ合う二人。

動いたのはナターシャさんだった。

クスッ

小さく笑った後、軽く手を振って踵を返した。

大人の余裕ってヤツだろう。

対する瀬戸さん、小さく唇をかみ、組んだ腕を放すと、そのまま他の生徒達に紛れて姿をくらませた。

悪いけど、瀬戸さんの敗北。

事件は、それから起こった。

最後の時間は自習。

でも、水瀬君も瀬戸さんも、教室にいない。
携帯も反応がない。

前の誘拐事件のこともある。

マスコミに紛れてさらわれでもしたら。

私達は、手分けして校内を探すことにした。

そして。

体育用具室。

「ンーツ！ンーツ！」

ガタガタ音を立てるのは、用具室の隅にある清掃用具入れ。
発見したのは私と秋篠君のコンビ。

開いた用具入れの中から出てきたのは、猿ぐつわをカマされ、雁
字搦めにロープで縛られた瀬戸さんだった。

「ど、どうしたの！？」

「や、やられました……あの女狐……！！！！！」

怒り心頭の瀬戸さんによると、瀬戸さん、「話がある」ってナタ
ーシャさんに、ここに呼びつけられ、有無を言わさずこっさらされたら
しい。

「敵の狙いは水瀬君です！」

私達には構わず、瀬戸さんは用具室を飛び出していった。

その頃

保健室

「や、やつと逃げられた……」

ナターシャとの鬼ごっこを逃げ切った水瀬が、保健室のベットに倒れ込んでいた。

あの夜のベットでの恐怖から逃げられたんだ。

その安堵感を象徴するように、水瀬の髪を撫でる手があった。

「……へ？」

「はあい？（はあと）」

ナターシャだった。

桜井美奈子の日記より

瀬戸さんが、保健室のドアを蹴破った所には居合わせた。

ただ、保健室内の光景を見た瀬戸さん、ちょっとアゼンとした後、髪を逆立てながら保健室の中に入って……。

水瀬君の命乞い、そして鈍い音と共に響く絶叫。

そんな中、服を直しながら出てきたのはナターシャさん。

ここで何があつたかは、楽天ブログが、1万文字を超えて入力出来る日まで、胸の中に秘めておくことにしよう。
その方がいい。

……絶対。

でも、

水瀬君……。

お気の毒様。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7985z/>

ショタコンお姫様はお好きですか？

2011年12月25日17時43分発行